衣類の脱着は少し手を貸すだけでできるようになり、靴下の着脱は自立、屋内を後から両脇を支え二周してみる。「足取りがしっかりしてきたようだ」と夫共々感想を述べる。

・1月初旬

介助でポータブルトイレの使用を開始する。夫の協力大きい。Cさん、パンツ、ズボンの着脱ができるようになる。

・1月下旬

訪問すると「昨日からオムツを外している」と聞かされびっくりする。排尿の間隔が短いというので、暖かくなったら始めましょうかと話した矢先の事だったからである。

・2月初旬

背中以外は全部自分で清拭でき、オムツ外しも順調で、夫の外出時以外は夜間も外していると聞き、夫の献身ぶりに感動すると「オムツを取り替えるより起きてさせるほうが楽さ。お互いに楽になったよ」と夫とCさん。

家の中から尿臭がなくなった。

屋内の歩行運動も快調で三周するまでになる。

・2月中旬

Cさん、シャツ、パジャマの着脱がができるようになる。「これで、清拭と衣類の着脱と全部できるようになりましたね、よく頑張りましたね」というと「あなたのおかげで当たり前の事ができるようになっただけよ」と照れながら話したが、その笑顔は自信の伺えるものであった。その後転倒して腰を打ち腰痛となる。

・3月中旬

清拭にも衣類の着脱にも余裕の出てきたCさん、自らボタン外しを始める。白内障のため、ボタンの穴がよく見えず中々外せなくて苦労していたが、「急がないで時間がかかってもいいですからゆっくりやりましょう」と声をかけると気をとりなおして再挑戦する。今までと違い指先に力がいる細かい仕事なので余計に大変だ。

・3月下旬

腰痛が強まり保健婦へ連絡し訪問してもらい、医療機関へつないでもらうが“心配ない”とのことなので安心する。

・4月中旬

長い間悩まされた腰痛がうすれる。

・5月中旬

汗をかきながら頑張ったボタン外しが全部できるようになる。

休む間もなくボタン掛けを開始し感心させられる。

3ケ月ぶりに歩行を開始し屋内を一周するが、腰に痛みを感じないと聞き安心する。

5月下旬

屋内の歩行も二周にふえる。

悪戦苦闘の末にボタンかけも自立。「スゴイですね。本当に頑張りましたよね」といって拍手すると、照れながらも嬉しそう。夫にも報告すると、おほめの言葉を頂く。「娘さんや息子さんに、できるようになったいろいろなことを伝えましたか」と尋ねると「よかったね」といってくれたとCさんは話してくれた。

・6月上旬

歩行三周、足取り安定し、軽やかで、振れる程度の介助でよい。

・7月上旬

前かがみだったCさんの歩く姿勢が、良くなっているの気づき告げると、

Ｃさんも夫もともに喜び合う。また、足浴中にふくらはぎに筋肉がついているのにも気づき、歩行の成果だと話し合う。次男との夜の散歩の効果も大きいと思う。

・７月下旬

屋内での歩行自立。安全のために付き添う程度の介助でよい。

Ｃさん「しっかり歩けるようになった」と夫からもほめられる。整髪にも積極的に加わる。

問題点

直接の介護者が高齢であり、膵臓が悪く、膝に関節痛あり。

８月に入院５日間。年に数回発熱し、通院回数が多い。

以前より保健婦が夫の負担の軽減のために、Ｃさんにディサービスの利用を勧めるが、Ｃさんは気乗りしない様子である。

今後のケア計画

１．夫の負担の軽減

①訪問回数を増やし内容を広げる。

②Ｃさんのできる家事への参加。

③ディサービスの利用

２．朝、パジャマを洋服に着替える。

３．歩行＋車椅子での散歩。

４．次男と車椅子での外出。

訪問していて思うことは、家族のＣさんへの暖かい態度と前向きな姿勢です。「そのうちにこうしてみましょうか」と話したことをすぐに取り入れ実行し実らせてらせていきます。Ｃさんの熱心な態度、オムツ外しへの協力と、歩行運動するＣさんに暖かいまなざしを向け「頑張らっせーよー」と激励の言葉をかける夫、

笑顔で介助にあたる俵介助員

帰宅後に入浴や夜の散歩をさせてくれる次男、遠くから足繁くやってきて身の回りの世話と家事援助する長女、Ｃさんの努力はもちろんの事、家族全員の支えがＣさんをここまで自立させてくれたのだと思います。いろいろな事を勧めても、耳を傾けてくれる人は数多くない中でのＣさんとの出会いは、私にとって幸せでした。ヘルパーとしての喜びを味わらせていただきました。

歩行運動をしながら私は、以前にＣさんと話した夢“浜へ歩いて富士山を見に行く”の実現が遠い日ではないのを感じています。

☆ハンディキャブ運行事業

1．事業の目的

車椅子や寝台車（ストレッチャー）のまま乗車できるハンディキャブ（車）を運行することによって、通院や社会生活上の移動手段を提供し、社会参加の促進を図ることを目的としています。

2．事業のシステムと利用者負担

本事業は、本市が県の「ハンディキャブ設置運行事業補助金」を受けて購入したハンディキャブを借り受け、行政補助事業として実施しています。

費用負担額ですが、有料道路料金及び駐車場料金は利用者負担となります。

3．対象者と運行の範囲など

対象者	利用条件	運行時間と範囲	利用手続き	利用範囲
寝たきり老人を含む最重度障害者（車椅子使用者及び寝たきり者）を対象者としています。 但し、自家用車を所有し、自分で運転できる方は対象外とします。	利用者の方は1名以上の介護者をつけなければなりません。	月～金曜日 AM 9:00-PM 4:00 土曜日 AM 9:00-PM12:00 ①三浦市内 ②横須賀市内 ③逗子市内 ④葉山町内	利用の申し込みは原則として利用する日の7日前から2日前までとなっています。	①病院への通院入退院 ②福祉施設への入退所 ③福祉施設公共機関へゆく時 ④近親者などの冠婚葬祭 ⑤社協等が主催する行事に参加する時

（表－12）

4．ハンディキャブ運行事業の職員配置

本事業の職員体制ですが、現在2名の運転員（本会非常勤職員）をもって対応しています。（1日おきに勤務）

	男女別			機器使用別		搬送地別	
元年度	男 124	女 178	計 302	車椅子 270	ベット 32	市外 176	市内 126
2年度	169	269	438	399	39	278	160
増減	45	91	136	129	7	102	34
伸び率	136.3%	151.1%	145.1%	147.8%	121.9%	158.0%	127.0%

	地域別			年齢別			目的別		
元年度	三崎 64	南下浦 130	初声 108	65以上 127	64～40 38	40以下 137	医療 163	福祉 129	その他10
2年度	131	189	118	201	86	151	266	137	35
増減	67	59	10	74	48	14	103	8	25
伸び率	204.7%	145.4%	109.3%	158.3%	226.3%	110.2%	138.7%	106.2%	350.0%

（表－13）

ハンディキャブ運行事業にかかる実践記録

～会話が通じ合うようになったK君の場合～

□後藤　繁光

私は、サービス協会発足と同時に採用され、ハンディキャブの運転員として勤務することになりました。

小型の自家用車を運転するのとは違って、車幅、車長も大きく、始めのうちは運転するのが精一ぱいで、乗っている人が、どういう気性の人なのか、どういう障害のある人なのかわからず、只黙々と病院や福祉施設へ無事送り、そして家に送り返すといった繰り返しでした。

しかし馴れてくるにつれいろいろなことがわかってきました。

利用する方は、ほとんどが夫婦か親子で、夫が歩行困難で妻がその付き添い、あるいはその逆の場合もありますが、それは夫婦睦まじく羨ましい限りです。

短気なご主人は、足の不自由さや病院での待ち時間の長さにいらいらして、つい奥さんにやつあたりすることもあります。それでも黙ってすましている人、また軽く反発してもにこにこしている人、逆に奥さんが肢体不自由でご主人が車椅子を押してどこへでも出かける人もいます。雨の日は自分の身を考えず奥さんに傘を差しかけて、早く車の来るのを首を長くして待っています。

車に乗ると二人の会話が何となく聞こえてくる、内容はよくわからなくても、その言動から夫に対する妻の感謝の念のようなものが、私にも切々と伝わってくるのです。

また、精薄者を抱えた親子も特別な絆で結ばれているような気がします。

雨の日も風の日も、子供を車椅子にのせ、また、抱いたり背負ったり福祉施設や養護学校へ通うのです。

つかれた様子もみせず明るい顔、できれば毎日送って行きたい気持ちでいっぱいです。人はそれぞれ努力していることを痛感させられました。

それでは標題のK君の場合の記録に移りたいと思います。

彼は体格のよい若者ですが、手足が不自由、言葉もあまり話せず、それでも頑張って毎日Y市にある作業所へ通っています。

月に何回か送迎のために行きますが、初めのうちは、ムッとしていてあまりよくない感じを受けました。でも何回かいった或る日のこと、毎日同じ道（帰りは若干違う）では、つまらないのではないかと思い、帰りはいつもと違う道をと、ハンドルを切ったたとたん、彼は怒りだし車椅子を揺すって大変でした。付き添いのおばあさんが「いつもの道は工事中で通れない」といっても朝、通った道なのでなかなか納得しません。何度か引き返そうかと思いましたが、おばあさんんと押し問答をしているうちに家の近くにきたので、やっと静かになり、ホッとしました。

それからは同じ道を通い三か月も経ったでしょうか、朝行くと笑顔で何かさかんに叫んでいました。

よく聞いてみると「後藤さん、後藤さん」と呼んでいるのでした。

私は気をよくして朝会えるようになり、そうしているうちに、曲がり角やバックする時、「オーライ、オーライ」というようになり、また、カーブする時ハンドルを回すと手をたたいて笑ったりするようになりました。

少しは運転がうまくなったとほめてでもいるのでしょうか？

それからまた暫くしてのことですが、彼を自宅へ送るため施設へ迎えに行った時のことです。車に乗るといつもと違い、何か言いながら手を右へ何回も動かすので、もしかしたら右へ曲がれといっているのかと思いましたが、逆方向なので一寸ためらいはしたもののあまりうるさいので、右折してからおばあさんに聞いてみると、昨日彼がお母さんの車での帰り、何時もの道は工事中で渋滞し、家に着くまでだいぶ時間がかかったそうです。

それで今朝家を出る時、お母さんから「いつもの道は込むので、別の道を通るように後藤さんに頼みなさい」と教えられていたのです。

帰路私も彼のいうことが少しはわかるようになったのかなあと思うと近親感を覚えました。

しかし、その後ボーリングの練習の話や、相撲の話（特に小錦が好きで、負けた時はすごく悔しがるそうです。国技館へつれていってくれといわれた事もあります。）をしてくれますが、手まねで察する程度でなかなか言葉は覚えられないようです。

今年は彼と一緒に、サーフ90の会場へ出かけてみました。最初はあまり興味なさそうでしたが、海中の魚やマグロ漁のテレビなどを見ているうちに、だんだん雰囲気に馴れていったようです。魚をさわれる水槽では、エビを持って彼に渡そうとすると、手を引っ込めてしまいました。小休止を交えて昼頃まで見学して帰りました。

リフトを操作する後藤運転員

この頃では私が電話をすると、彼がそばにいる時は「電話に出る」というそうです。出ても彼のいうことはあまりわかりませんが、「後藤さん、後藤さん」と繰り返し「待っています、お願いします」ともいっているように感じられます。もっと話が通じればよいのになあ、としみじみ思うこの頃です。

一日が終わって送って行くとお母さんが家の前で待っています。お帰りなさいと声をかけ、車椅子から降りると、そこから彼を背負って坂道を上って行きます。この後ろ姿を見る度に親の愛情の深さを思い、頼もしくもあり、また胸が熱くなるのを禁じ得ません

このような家族が三浦市、否、全国に大勢いることを考える時、福祉事業の重要さを再認識し、その責任を痛感しています。